



安達峰一郎の肖像画（東北芸術工科大文化財保存修復研究センター提供）

山辺出身の国際法学者

安達峰一郎の 収集品、帰郷

山辺町出身の国際法学者・安達峰一郎（1869～1934年）が収集した美術コレクションの一部が、修復を経て山形へ「帰郷」する。安達峰一郎記念財団（東京）所蔵の48点が山形美術館（山形市）に寄託されることになった。世界平和を目指す傍ら文化交流にも力を注いだ足跡を伝える貴重な作品群で、同美術館は来年度に顕彰企画展を計画している。

来年度に顕彰企画展 計画

同財団は、安達の死後に妻・鏡子（かみねこ）が欧州から日本へ持ち帰った美術コレクション約130点を事務所と倉庫で展示・保管。多くは一般公開される機会がなかったため、より多くの人に鑑賞してもらおうと2021年度から5カ年計画で優先度の高い作品から修復を進めてきた。東北芸術工科大（山形市）文化財保存修復研究センターや同大の中右恵理子教授らが修復を担った。寄託契約は8月29日付。

寄託されるのは、19世紀末から1920年代ごろの作品が中心で、西洋画41点、日本画4点、彫刻3点。安達が外交官として欧州などに駐在した際に交流を深めた国内外の作家35人の作品だ。印象派の先駆者として知られるフランスのドービニーやベルギー象徴主義の代表格クノップフら著名作家も含まれる。

安達の文化交流を象徴するのが、安達の肖像画（縦200センチ、横150センチ）だ。スリ姿の全身像がベルギー出身でポスト印象派のバースによって描かれ、その穏やかな表情から親密な間柄がうかがえる。バースは関東大震災時、ベルギーの芸術家に呼びかけ

て多くの作品を日本へ寄贈する援助活動を展開した。一方、安達は欧州へ渡った日本人芸術家も支援した。パリ市内に一軒家を借りて自由に使わせ、自宅に招いて鏡子が作った日本料理でもてなしを激励した。そうして親睦を深めたパリ派を代表する画家藤田嗣治や庄内町名誉市民の画家内藤秀因の作品もある。

小品ながら、近代彫刻の父と称されるロダンの彫刻作品2点も見どころの一つ。1900年のパリ万国博覧会に安達が準備委員として派遣された際に本人から直接もらったとされ、生涯大切にたとわ

（伊藤律子、坂元かおり）

東京の財団、山形美術館に48点寄託へ